

写真左から、上野、阿部、菅原



## 佐沼高ボート部

### 「New challenge」

全国高校総合体育大会 ボート競技  
女子シングルスカル準々決勝進出 菅原紗弥  
女子ダブルスカル出場 上野有里、阿部佑香

春の全国選抜大会に女子舵手付クオドルプルで出場した佐沼高ボート部。夏の大会はそれぞれ別の種目で挑むことを決めた。

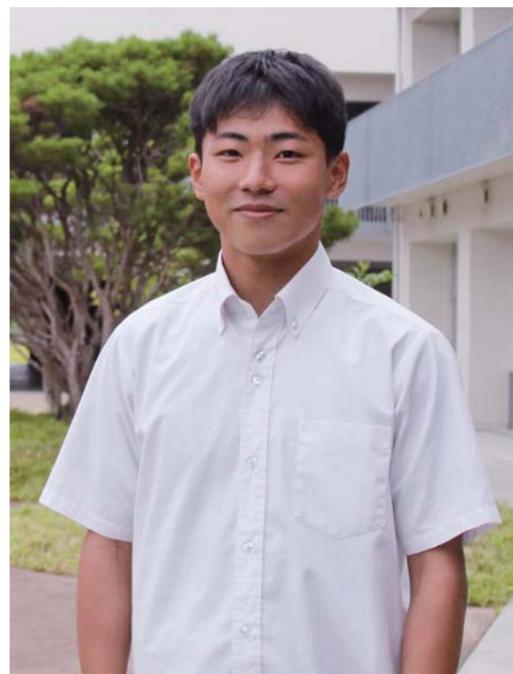
ダブルスカルで大会へ臨む阿部は「漕ぎ手が4人と2人では競技が全く違う。バランスが取りづらく不安しかった」と話すと、同じくダブルスカルを選んだ主将の上野が「最初はレースを漕ぎ切れるかすら不安だった」と続けた。不安を取り除くには練習しかない。大会までの少ない時間の中、二人は他のどの部員よりも練習に励んだ。

県大会、1000mのコースを4分以内で漕ぎ切り、優勝することを目標に設定。予選を1位で突破し、迎えた決勝戦。スタート直後、二漕ぎ目で水面を叩いてしまいい遅れをとるも、「あれだけ練習したんだから絶対に追い付ける」と、冷静に追い上げる。徐々にペースを上げ、1位に躍り出ると、最後まで手を緩めることなく3分59秒でゴール。有言実行を果たした。県大会の反省から、スタートに磨きをかけ、臨んだ全国大会。スムーズにスタートを切るものの、周りは全国から集まった精鋭たち。ハイレベルなレース展

開に食らいつくが、中盤から徐々に離され4位でフィニッシュ。3分55秒のベストタイムを記録するも予選突破はならなかった。それでも阿部は「ありちゃん(上野)がいたから頑張れた。一緒にできてよかった」とはつらつとした表情で振り返った。

菅原は出場者が最も多いシングルスカルで勝負することを選択。「県大会まで時間は少なかったけど、気持ちを切り替えて取り組んだ。練習していく中で自分が速くなっていくのを実感できて楽しかった」と話す。県大会決勝、得意のスタートダッシュを決め、周りを引き離したままゴール。シングルの短さを感じさせないレース展開を見せた。全国大会でも、強豪校がひしめく中、予選を突破し準々決勝進出。今夏、佐沼高ボート部として最高の成績を収めた。

「たくさんお世話になった先生や卒業した先輩、親の会に本当に感謝している。後輩たちには全国で優勝を目指してほしい」と、主将の上野。部活を引退し、互いの進路に向けてスタートラインに立った3人。夢に向かい真つすぐとオールを漕ぎ始める。



後藤 蓮季 登米総合産業高 3年

## 全国高校総合体育大会 アーチェリー競技大会出場

## 「モチベーション維持」

中学1年の時に、先輩のデモンストレーションを見て、カッコいいと思ったのがきっかけでアーチェリー部に入部。高校進学後も続けて、6年。記録が伸び悩んだ時期、部活を辞めようかと自問自答し葛藤があった。モチベーションを維持することが、どれだけ重要になるか身に染みて学んだ。「練習してきた仲間たちと互いに支え合い切磋琢磨できたことが、長く継続できた要因」と感謝の念を話す。

6月5日、秋保森林スポーツ公園総合グラウンドを会場に開かれた「第70回宮城県高等学校総合体育大会アーチェリー競技大会」に出場。個人の部で見事、優勝を果たし、団体の部では、4人1組で3位に入賞することができた。

8月20、21の両日、福井県鯖江市東公園陸上競技場を会場にして開かれた全国大会では、185人中88位。今まで磨き上げた自分の力を全て出し切り、後悔はない。新しい道へ、己を向上させる覚悟ができた。

## 夏に挑む Zoom Up Tome 2021 Special

### 「培った技術を究める決意」

6月1日に開催された「第59回宮城県高等学校ワープロ競技大会」に出場し、個人の部で見事第1位、県代表の座を獲得。同大会団体の部では、4人1組で出場し、仲間とともに9校中2位の好成績を取めた。「ここまで成長できたのは、ともに競い合ったチームメンバーがいたおかげ」と話す。

8月4日、愛知県名古屋市の中企業振興会館を会場に開かれた「第68回全国高等学校ワープロ競技大会」では228人中110位の順位。県代表の役割を十分に果たした。全国各地から代表5人が集う大会は、コロナ禍で感染症対策が懸念され不安はあったが、自身が培ってきた技術を最大限に引き出し、タッピングの速さを競う大会に挑んだ。

小さいころから興味があったパソコンの操作技術を学びたいと、高校では「商業部」に入部。タッピングの記録が伸びず、自己嫌悪に陥った時期もあった。高校で身に付けた技術を生かして、プログラマーになるため、進学して高みを究める決意を固めた。

## 全国高等学校ワープロ競技大会 個人の部出場



渡邊 鉄 登米総合産業高 3年